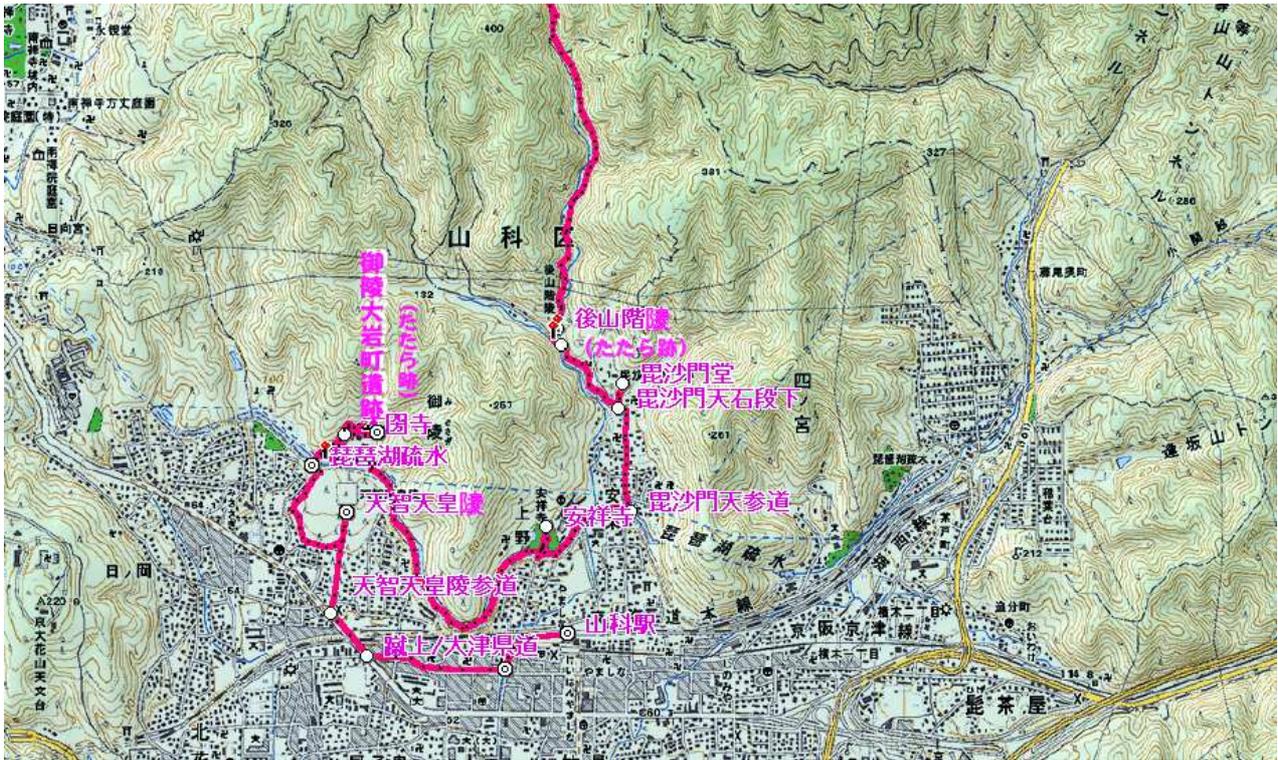


## 1. 山科駅から旧東海道を天智天皇陵から古代のたたら跡 御陵大岩町遺跡へ



山科は京都の市街地と東山で隣接する閑静な住宅地で、北の山裾を琵琶湖疏水が琵琶湖から京都へ水を運び、その堤の桜並木の美しさは すぐ傍にある毘沙門堂と共に京都の桜の名所として名高い。

また、この地は琵琶湖から南の大和 そして東国と西国をつなぐ交通の十字路に位置し、近江京を造営した天智天皇陵などがある古代からの要衝の地であり、現在も東西南北交通の要衝の地であると共に、京都市街のベットタウン そして 京都をめぐる落ち着いた観光地として発展を続けている。



東を琵琶湖・大津と隔てる長等山・逢坂山 西に京都東山 北には比叡山から伸びる大文字山・如意ヶ岳と三方を山に囲まれ、南だけが宇治・南山城から大和へ開けた盆地状の地でその中央を北の大文字山から小さな谷川 安祥寺川が流れ下る。そして 山裾を東西に東海道が通り抜け、今も昔も京都と琵琶湖を結ぶ。

西にゆけば、京都山城から難波・西国へ 東には近江・琵琶湖から北陸・東国へ そして南に行くと醍醐・宇治から大和へとつながる昔も今も交通の十字路。

現在も西に京都東に琵琶湖に挟まれ、名神高速道・東海道新幹線 そして国道1号線やJR 東海道線が東西に走り抜け、北の山裾にある JR 山科駅からは東海道線・湖西線が分岐する。そして、京都三条から峠越えてきた京阪電車・地下鉄が JR 山科駅に隣接するそれぞれの駅から東の浜大津 南の醍醐・宇治へと走りぬけてゆく。また、京都の近代化を支えた琵琶湖疏水が北の山裾の高台の林の中を東から西へゆったりと流れてゆく。



京都駅を出た新快速電車が加茂川を渡るとそのまま東山トンネルに 飛び込み、トンネルを潜り抜けると、緑に包まれた山科の街が目飛びこんで来る。電車がスピードを緩めると北側の山々を背に京都蹴上から峠を下ってきた広い三条通 そして その向こうに天智天皇陵の広い森が見え、まもなく山

科駅に滑り込む。山科の町へ降り立つのは随分ひさしぶり。ごちゃまぜに電車の線路が入り組んでいた駅周辺が整備されて、もう随分経つが、電車の乗換えでホームには何度か降りましたが、駅の外に出るのは整備後はじめて。こんなにきれいになっているのか・・・と。

新快速が停車し、湖西線・東海道琵琶湖線が分岐し、駅の南にはすぐ京阪・地下鉄の駅で、ターミナル駅ではないが、京都南のターミナルとして整備されていますが、駅から出て、幹線道路をはずすと閑静な住宅地が広がっている。



JR 山科駅周辺 2013. 8. 26.

午前 11 時過ぎ 今日山科駅の北側の山裾を歩いて 古代のたたら跡を訪ね、大文字山への山科登山口から大文字山頂上から銀閣寺へ抜ける。古い古代のたたら跡 どれほど痕跡が残っているだろうか・・・

また、大文字山・如意が岳周辺は以前から気になっていた古代近江の製鉄遺跡群の鉄原料鉄鉱石採取地のひとつ。そんな鉄鉱石の痕跡を見つけることができれば・・・

この Walk の道筋には 京都の観光名所天智天皇陵・琵琶湖疎水そして山科毘沙門堂もある。そこにも立ち寄りながら大文字山への古代のたたら道をたどる。



● JR 山科駅から旧東海道 山科三条通を西へ 天智天皇陵へ

JR 山科駅の南口に出て、京阪山科駅との間の狭い道を東に少し行くと、大文字山から南に山科の盆地の中央を流れる安祥寺川にぶち当たる。これが、山科の中心河川？

と思う小さな小川であるが、清水が流れ下る。この川に沿って一本南側の道に出ると東西に落ち着いた雰囲気の家並みがまっすぐ続く街道筋。京都三条へと続く旧の東海道。古い街道筋の家並みを眺めながら西へたどると東海道線の高架橋のところまで広い新車道府道 143 号との十字路。

この広い道の高架橋をくぐると傍に御陵交番がある天智天皇陵参道の入り口。広い緑の森が家並みの向こうに広がっている。駅から 30 分ほどである。



山科駅のすぐ西の傾斜地を南へ流れる安祥寺川



まっすぐに街道筋が家並みの中を伸び、  
「左は五条橋 東に六条大仏・今熊清水  
道 右は三条通」と記された五条別れの  
道標。

この道標 江戸時代 左へ行くと京都五  
条・伏見方面の近道だったことを示して  
いるという。

また、軒先に「笠をかぶった茄子」をも  
じった人形がぶら下がっている。

「京茄」の産地「山科茄子」をもじった  
「なすびくん」がこの三条通りのキャラ  
クター人形だと聞きました。



京都三条へと続く旧東海道 山科三条通 2013. 8. 26.



JR 東海道線高架橋 山科三条通と府道三条通新道との交差点のすぐ横 2013. 8. 26.



JR 東海道線高架橋のすぐ西 天智天皇陵前 2013. 8. 26.

## ● 天智天皇御陵



天智天皇陵 参道 2013. 8. 26.

北の山裾にある御陵へ向かって 林の中をまっすぐ奥へ伸びる参道 誰一人いない静かなものである



天智天皇御陵 2013. 8. 26.



天智天皇陵の誰もいない静かな森の中で 尺八を演奏する青年に出会いました。

天智天皇は大陸・半島の先端技術を取り入れ、藤原氏と組みつつ、大化の改新・蘇我氏を滅亡させ、大和政権の天皇中心の中央集権の国づくりを推進。白村江の戦いに唐・新羅連合軍に敗れたあと近江京を造営し、その後すぐになくなり、世の中は壬申の乱へと突き進んでゆく。『日本書紀』巻27には「天智天皇9年(670年)「是歳、水碓を造りて冶鉄す」の記事があり、近江京近く、しかも当時の先端技術「製鉄」を担ったたたら跡が点在するこの地に天智天皇の御陵がある。尺八の音が静かな森に響きわたり、古代の森へ帰ったような雰囲気にはしばし耳を傾けて、古代たたら郷に思いをめぐらしながら、尺八の澄んだ調べに聞き入っていました。

● 天智天皇陵の北側を流れる琵琶湖疎水から古代のたたら跡 御陵大岩町遺跡へ



天智天皇陵の森の西側に沿って北へ住宅地を琵琶湖疎水へ 2013. 8. 26.

天智天皇陵の森の西側に沿って、北へ住宅地を抜けると山裾の高台を緑の中を東から西へゆっくり流れる琵琶湖疎水に出る。すぐ東に赤い橋が架かっているのが見え、資料によれば、この橋を渡った北側に古代のたたら跡御陵大岩町遺跡がある本圀寺境内が広がり、北東奥の境内の端にたたら跡の石柱が立っているという。



天智天皇陵の北側を流れる琵琶湖疎水 疎水を挟んでさらに北側の山裾へ 赤い橋を渡って本圀寺境内へ

赤い橋を渡って、山裾に広がる本圀寺にいったびっくり。本当に広い境内の大きな寺で、日蓮宗の西の総本山。もともと京都六条堀川にあったのが、昭和 44 年にこの地へ移ってきたと境内で作業していた石工のおじさんに聞きました。「たたら跡」がどこかにあるのですが・・・と訪ねると「その建物の間をくぐりぬけて、境内の東側の縁へ出れば、そこに「たたら跡」の石柱が建っている」と教えてもらった。大きな寺なのに、山科のガイドに載っていないのはまだこの地に来て、あたらしいためか・・・・。また、石工の人の話によれば、次々と本圀寺は整備されてきたので、遺跡周辺をふくめ、この地は大きく変貌してきたと聞きました。



非常に広い本圀寺境内 一部インターネットより借用

立派な伽藍が建つ境内の建物の間を東側奥山裾に回りこむと新しい墓地があり、その手前境内を囲む石垣の上に「たたら跡」の石柱があり、境内の端に沿った石垣の向こうに広がる森の中が古代のたたら跡 御陵大岩町遺跡と知れました。石柱には「この付近 たたら遺跡」と記されているだけで、案内板ほかはみあたらず。樹木が生い茂る山の斜面に沿って、一本山道が北へ通じているのみで、詳細はわからず。インターネットで調べた遺跡概略図を取り出して、遺跡の概観状況をイメージしながら森の中を歩きました。



古代のたたら跡 御陵大岩町遺跡 2013. 8. 26.

## 2. 7世紀のたたら跡 御陵大岩町遺跡

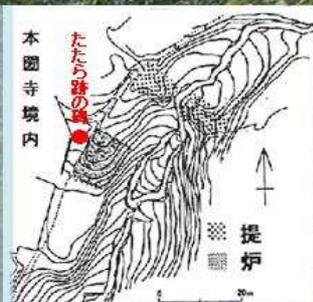
### 2. 御陵大岩町遺跡 (7世紀のたたら跡)

『日本書紀』巻27、天智天皇9年(670年)

「是歳、水碓を造りて冶鉄す」

この記事から、堤を築いて、ダムを作って水車を動かし、この水碓(みずうす)によって鉄鉱石を粉砕して 鉄製錬を行ったとの説がある。

大陸・朝鮮半島の先端技術導入を進めた天智天皇陵に隣接する山科のこの地で 7世紀後半の堤・炉があるたたら跡が出土し、この遺跡が符合するとの考えもある。



### 御陵大岩町遺跡 (たたら) 跡

北海道大学博物館 天野哲也ほか「コラム-御陵大岩町遺跡の水碓-」より転記)

[www.city.kyoto.jp/bunshi/maibun/tizudaityou/yamasinaku.html](http://www.city.kyoto.jp/bunshi/maibun/tizudaityou/yamasinaku.html)

御陵大岩町遺跡(大岩たたら跡)は、天智天皇陵が隣にあることや、『日本書紀』天智九年中の「水碓」についての記述がこの遺跡と関連があると考えられることにより、以前から注目されています。

長さ 20 メートル、高さ 2 メートル、幅3メートルほどの堤状遺構と、幅 25 メートル、10 メートル四方のなだらかなテラス状の部分からなり、テラス部分の表面に散乱した鉄滓は二次堆積であることが分かっています。

遺跡の成立年代について詳しいことは明らかではありませんが、天智天皇陵の領域内にあたることから、操業時期は 699 年以前の 7 世紀後半と考えられています。また、採集した鉄滓は調査結果から、流動性のよい製錬滓で、磁鉄鉱が原料鉱石であったことが明らかになっています。

中大兄皇子(天智天皇)が作ったとされるこの「水碓」についての『日本書紀』の記述を冶金学的見地から考察すると、鉱石をくだいて砂鉄と同様の粉状にするためのもの

と解釈でき、水碓は鉱石をくだくための装置であるといった理解が専門家の間で進みました。



石柱が立つ場所は南北に続く小さな尾根筋でこの尾根の東側斜面下には小さな谷川がこの尾根に沿って流れている。

石柱の南側の尾根筋は雑木が生い茂っているが、平坦面があり、その下は谷まで境内の一部に平たく削られている。

また、石柱のところからは尾根の東斜面に沿って奥へ雑木林の中を奥へ山道が付いている。

資料に見られる製鉄炉があつたとみられ、鉄滓が散在していたテラスはどうも石柱が立つ場所より南側の平坦面 そして堤は道に沿って登ったあたりと推察されるのですが、山道を登って行くと、いくつか起伏がり、また 斜面を谷川まで降りたのですが、堤の位置は分からず、また、鉄滓が散在すると記録されているのですが、よう見つけませんでした。



製鉄炉があつたと思われるたたら跡の碑周辺 南側より 2013.8.26.



古代のたたら跡御陵大岩町遺跡 南側からの全景 2013.8.26.



たたら跡の碑より北側林の中へ入ったところ(1)  
上からたたら跡の碑側を眺める

この尾根筋の上から、石柱を眺める 2013.8.26.

が堤のあった場所と見られるのですが、よくわからずでした



製鉄炉があったテラス状の場所と推察される石柱横の平坦地



堤があったという尾根の東斜面奥への道周辺の雑木林の中 2013. 8. 26.



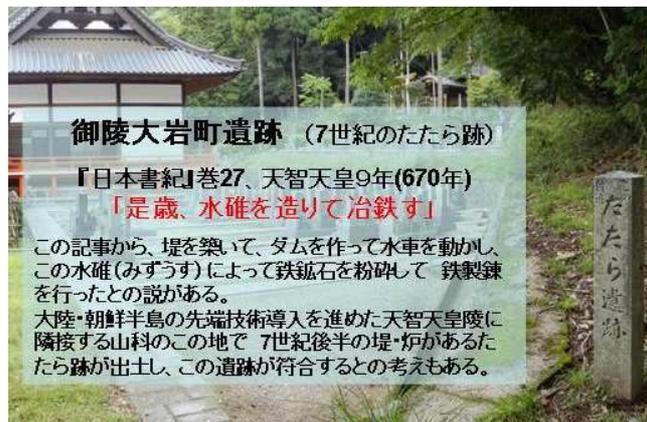
東斜面の下を流れる谷川にも下りてみましたが、堤の痕跡はよく分からず 2013.8.26.



たたら跡の痕跡が見つからないか、鉄滓が散在していないかと探しましたが、静かな林の落ち葉の中、痕跡は見つかりませんでした。なお、隣接する本光園寺は日蓮宗の大本山で昭和44年京都六条堀川から移ってきた。このため、遺跡周辺は大きく変貌していると思われます。



たたら跡の尾根の奥から本園寺境内を眺める 2013.8.26.



御陵大岩町遺跡 (7世紀のたたら跡)

『日本書紀』巻27、天智天皇9年(670年)  
**「足臈、水碓を造りて冶鉄す」**

この記事から、堤を築いて、ダムを作って水車を動かし、この水碓(みずうす)によって鉄鉱石を粉砕して、鉄製錬を行ったとの説がある。

大陸・朝鮮半島の先端技術導入を進めた天智天皇陵に隣接する山科のこの地で、7世紀後半の堤・炉があるたたら跡が出土し、この遺跡が符合するとの考えもある。